

英語基礎学力向上のための高大連携：現状と課題

津田 晶子¹⁾ 居村 俊子²⁾

Coordination between Upper Secondary Schools and Universities for Improvement of EFL Skills: Cases and Challenges

Akiko Tsuda Toshiko Imura
(2014年11月28日受理)

キーワード：英語教育、リメディアル、初年次教育、English for Specific Purposes、CLIL、カリキュラム開発

0. はじめに

平成25年4月、本学では「高校で学習した内容が不十分」「授業についていけない」など、学生一人ひとりの悩みや不安を解消し、学習を支援するため、「基礎教育センター（以下、センター）」が開設され、大学の多様な履修への対応を図るため、基礎学力を向上させる個別指導や、学内講座を開講し、高等学校教育から大学教育への円滑なシフトをサポートしている。（本学公式ホームページより）この基礎教育センターには、高校での指導経験が豊富な教育職員が常駐している。

本稿では、食物栄養学科の英語教育を例に、「大学教員から見た英語教育における高大連携」と「基礎教育センター教員から見た英語教育における高大連携」として、「大学教育の場での集団授業」と、高校と大学の橋渡しのための「基礎教育センターでの個別指導」での連携について報告する。

人教員3名が、学科ごとに英語の専任教員が配属されているため、①の「学部型」にあたる。

表1 英語専任教員の人数構成

| | | 外国人 英語教員数 | 日本人 英語教員 | 英語教員 合計数 |
|-------|-------------------|--------------|-------------|-------------|
| ビジネス系 | 流通科学部 | 1 | 3 | 4 |
| | 短期大学部 キャリア開発学科 | 1 | 1 | 2 |
| 教育系 | 教育学部 | 1 | 1 | 2 |
| | 短期大学部 幼児保育学科 | 0 | 1 | 1 |
| 栄養系 | 栄養科学部 | 0 | 1 | 1 |
| | 短期大学部 食物栄養学科 | 0 | 1 | 1 |
| 合計 | | 3 | 8 | 11 |

平成26年9月29日現在

1. 大学教員から見た英語教育における高大連携

1.1 中村学園大学の英語教育の特徴

大学の英語教育を担う運営組織には、①各学部の英語教員が学部在籍する「学部型」、②外国語教育に携わる教員がセンターに所属し、集中的に運営する「センター型」、③全学教育に学部独自の教育を加えた「ハイブリット型」があるとされる（松本, 2013）。本学の場合は、「ビジネス系」の流通科学部、短期大学部キャリア開発学科（日本人教員1名、外国人教員1名）、「教育系」の教育学部、短期大学部幼児保育学科、「栄養系」の栄養科学部、食物栄養学科と、日本人教員8名、外国

「センター型」「ハイブリット型」は、非常勤講師依存率が高い総合大学には適当であるが、「前年度末まで、場合によっては学期開始の直前までどの学部・学科の英語教育を担当するかが分からない」という短所がある。短期大学、大学、大学院を合わせて学生者数4,100人（平成26年5月1日現在）の中規模で、実学系教育重視型の大学である本学は、英語教育における非常勤教員依存率が低く、現在の学部型が最も学生の語学ニーズに合致していると考えられる。「学部型」の長所として、学生の卒業後の語学ニーズがあらかじめ把握しやすいこと、毎年、どの学部・学科を指導するか、前もってわかっていること、学科専属教員としての語学教育の蓄積が発揮できること、専門教員からのサポートを得やすい

別刷請求先：津田晶子，中村学園大学短期大学部食物栄養学科，〒814-0198 福岡市城南区別府5-7-1
E-mail：atsuda@nakamura-u.ac.jp

1) 中村学園大学短期大学部食物栄養学科 2) 中村学園大学・中村学園大学短期大学部基礎教育センター

ことなどが挙げられる。そのため、English for Specific Purposes (以下、ESP。特定の目的のための英語。ある特定の目的をもって学習され使用される英語のことで、一般的目的の英語、English for General Purposes/EGPと対照をなす概念) (白畑他, 2009) や、英語で専門科目を教える Content and Language Integrated Learning (以下、CLIL) を導入するのに適している。

1.2 短期大学部食物栄養学科の英語カリキュラム

食物栄養学科では、現在、6科目の英語科目が開講されており、必修の英語基礎1単位を含め、2単位以上の履修が義務付けられている。現在、栄養系には専任の外国人英語教員がいないため、学科の特殊性について事前に伝え、どの外国人教員にあたって同等内容の授業が受けられるように複数の教員で担当する科目については同一教材を使用するように心がけている。

1.3 科研費プロジェクト『日本の栄養士・管理栄養士養成校における英語教育調査』が示す日本の大学の栄養英語教育の現況

平成23年11月28日～平成23年12月31日に『日本の栄養士・管理栄養士養成校における英語教育調査』を実施した。発送校数300か所中、回収数139サンプル(回収率:46.3%)で、内訳は英語教員38(27.3%) 専門教員97(69.8%)、その他4(2.9%)である。

管理栄養士・栄養士養成学科の学生に対する英語教育の目標は、「栄養学関係の英語」(ESP)が111件(79.9%)と最も多く、次いで「論文読解力の養成」89件(64.0%) (ESP)、「大学生・短期大学生・専門学校生の幅広い教養」75件(54.0%) (EGP)、「調理関係の英語」67件(48.2%) (ESP)、「英会話能力」60件(43.2%) (EGP)となっており、より専門に特化した英語教育が望まれていることが分かる。

しかしながら、「貴校で専門英語(栄養)教育を実施する場合、現在の学生の英語力はどうか?」という質問に対して、専門英語(栄養)教育を実施する場合、現在の学生の英語力については、「問題ない」2.9%、「少し問題あり」33.1%、「大いに問題あり」53.2%で、8割強が問題ありと回答している。また、その具

体的な内容については、「英文読解力の低下」102件(85.0%)、「英語語彙力の低下」89件(74.2%)、「英文法力の低下」80件(66.7%)、「英作文の低下」61件(50.8%)、「英語による口頭表現力の低下」53件(44.2%)となっている。「今から10年後には栄養士、管理栄養士の業務で「英語」は今より一層必要になると思われますか?」という質問に対して、特にリーディングは、「今より一層必要」59件(54.7%)、「今よりやや必要」53件(30.2%)という回答が得られ、8割以上の回答者が、栄養士としてのリーディングの語学ニーズを認識している。

1.4 多様化する本学短期大学部の学生像と英語教育

現在、本学短期大学部食物栄養学科に入学している学生は、一般入試、推薦入試、指定校推薦入試、社会人入試によって選抜されているが、一般入試で英語を選択しない限り、本学入学時に英語力を問われることはない。短期大学部を2年間で卒業した後、栄養士としての就職を望む学生が一般的だが、近年の傾向として、本学の四年制大学、栄養科学部への編入学を入学時から希望しているものが増加している。本学の編入学試験には、専門科目と英語が課されるため、入試の英語対策について、相談を受けることも多くなった。

食物栄養学科では、社会人入試で入学した大卒・大学院卒の学生で英語の単位認定を希望した者以外の学生全員が、1年前期に「英語基礎」をクラス単位で受講している。Placement Test(到達度によるクラス分けテスト)をしていないため、1クラス26名前後の中で、アルファベットも覚束ない学生から、英語圏からの帰国子女や英語重点校卒の学生、年度によっては、大学院卒、大学の英文学部卒学生などまで、一緒に同じ教室、同じ教材で学んでいるという現状がある。卒業後の進路についても、二年間で卒業して保育園、病院、高齢者施設、企業で栄養士として働くもの、一般企業への就職を志向するもの、編入学試験を受験して将来は管理栄養士を目指すもの、また、最終的には大学院に進学し、研究者を目指すものとさまざま、将来の英語ニーズも多様化している。

表2 食物栄養学科の英語カリキュラム(平成26年度例)

| 時期 | 科目名 | 担当者 | | 単位数 | 授業内容 |
|------|---------------|----------|----|-----|------------------|
| 1年前期 | 英語基礎 | 日本人教員 | 必修 | 1 | EGP(一部ESP) |
| 1年前期 | 英語コミュニケーション入門 | 外国人教員 | 選択 | 1 | EGP |
| 1年後期 | 英語コミュニケーション | 外国人教員 | 選択 | 1 | EGP(一部ESP) |
| 1年後期 | 海外・英語研修 | EFLクラス | 選択 | 1 | EGPおよび海外の栄養士施設見学 |
| 2年前期 | 実用栄養英語 | 日本人教員 | 選択 | 2 | ESP/CLIL |
| 2年後期 | 認定科目 TOEIC | スコアによる認定 | 選択 | 1 | Assessment |

平成26年7月に高校時の英語の授業時間数について、非公式の予備調査を実施したところ、「高校1年生の時に中学の復習程度の週1時間あったのみで、それ以降は高校で英語の授業はなかった」という学生もいる一方で、「補習を含めると、1週間に10時間程度、英語の授業があった」という学生もいた。また、海外渡航歴についても、保護者の仕事の都合で海外に長期住んでいた学生や、修学旅行や語学研修、家族との旅行などで海外経験があるものもいれば、海外経験が全くない学生もいる。

短期大学部入学までの英語学習時間・経験および海外渡航歴の多様化が進んでいるため、従来型の教師中心のGrammar Translation Method（文法訳読法）によって、全員の学生の現在の英語レベルに合わせた授業を展開するのは困難である。リメディアルレベルの学生が不安感を覚えずに授業に参加でき、同時に、「語学が得意」「英語が好き」という学生が「授業が簡単すぎる」と退屈しないように、「栄養士・管理栄養士としてのニーズを考えたESPを導入」「学習者中心のCommunicative Approachを心がける」「ほかの学生と比較するのではなく、到達度評価にする」を方針とし、具体的には、音読、ペア学習、辞書引き活動、食育プレゼンテーション、図書館活動、単語コンテスト、英語レシピ作成コンテストなどを実践している。

また、当学科には聴覚障害の学生を受け入れることもある。受験生や高校側が受験の可否に不利に働くと考えてか、本学受験時には申告せず、入学後に個別に相談に来る学生もいる。センター試験でリスニングが導入された影響か、四年制大学を敬遠して、短期大学部なら、ということで入学する学生も増えることが考えられるので、授業でリスニングのアクティビティを導入するには配慮を必要とする。

1.5 栄養系学生のための英語教育の高大連携

「1レッスンあたり300~400words程度しかない英文が10レッスンしかない教科書を年間75時間もかけて読んでいるような授業を行っているような高校の英語教育」（松本，2013）というのが、本学の学生が高校時代に受けてきた一般的な英語教育とすれば、将来、英語話者相手に栄養指導をしたり、英語の論文を読解したりするには、語彙数とインプットの量が絶対的に不足しているため、2年間という限られた時間の中でいかに効率よく、卒業後のニーズに合致した英語の四技能を身に着けさせるかが重要である。

食物栄養学科の学生全員が受講する「英語基礎」では、学生の語彙レベル、文法習得レベルが多様化しているため、ESP的要素を増やし、栄養や食文化に関するテキストを読み、食物栄養の関連語彙を増やすことを主眼

にしている。苦手意識を持つ学生に対しては、平成26年度からは「基礎教育センター」で個人指導を受けるよう、学生に提案している。具体的には、①音読が苦手、②英和辞典の使い方が分からない（電子辞書を含む）、③編入学対策をしたい、④社会人学生で初歩から学びなおしたい、という要望があった。これらは、集団授業の中ではなく、他の学生の目を気にせず一対一で高校教員としての経験のある基礎教育センター教員から指導を受けることで、学生が通常の授業にも自信を持って積極的に参加できるようになると考えられる。

2. 基礎教育センター教員から見た英語教育における高大連携

2.1 センターの現状

センターでは、学習のつまずきや不安を取り除くために個別指導から講座による指導までを実施しており、編入試験に関する事・授業への不安・TOEICや実用英検・海外留学に関する相談などがある。平成25年4月から3月末日までの約一年間に英語の個別やグループでの相談や指導の数は1,507件であった。この中で食物栄養学科の学生の利用率は高く545件であった。食物栄養学科の学生による大学への編入学試験（専門科目と英語が課せられる）の受験関係が多いこともあるが、実力をつけたいという意欲ある学生が多い。

2.2 センターを訪れる学生の現状

英語を理解したいという学生がセンターに足を運んでくる。しかし大半の学生は英語に対して「出来ない」、「苦手だ」と思い込んでいるからか、一見すると消極的に見受けられる。なぜならば英語を言語として捉えず、概ね暗記科目と思い込んでいる傾向にあるからである。中学・高校と合わせると1,000時間以上も英語教育に関わってきた中で苦手意識を鬱積させた学生に、それまでと同じやり方で教えても語学力習得への道のりが近づくとは言い難い。

高校で教鞭をとり始めた頃、英語が嫌いで仕方がない状態の生徒に教えていると、イライラして貧乏ゆすりを始める生徒や、泣き出す生徒や、顔つきが険しくなって怒りだす生徒や、パニック状況になる生徒の対応に苦慮した。なぜならば、休憩のタイミングや習熟度の把握が出来ていなかったからであった。この経験は、現在センターでの指導に大いに役に立っている。センターへ足を運ぶ学生に対して、一期一会の精神で指導をすることが肝要である。初回の指導でタイミングを見誤るとそれきりになってしまうからである。

2.3 指導の実践と考察

2.3.1 音読指導の実践

英語に対して苦手意識が強い学生には、単語や文法からの導入ではなく別のアプローチ法として、音読指導を用いることにした。まず、テキストの選定は慎重を期した。学生のレディネスに関わるからである。テキストは学生が所有しているものの中から『FUKUOKA 英語で楽しむ福岡の郷土料理』（津田晶子，松隈紀生，トーマス・ケイトン著，2009）という英文レシピが最適だと判断して用いた。このテキストは、本校の大学教員3名によって作られた福岡の食文化を四季に合わせて楽しめる内容のレシピである。学生たちにとっても関心の高い料理に関するテキストは、彼女達のレディネスを大いに誘発できた。

2.3.2 音読指導の事例報告

次に2人の学生の実践例を挙げていきたい。

事例① 学生A（短期大学1年）の場合

(1) バックグラウンド

食物栄養学科の高校を卒業し、英語に苦手意識を持っている学生であるが、将来海外に自分の店を開きたいという夢を持つ。小学校時代は、英会話を習い英語は好きであった。

しかし中学時代に、テストでひどい点数をとって以来、自分は何が理解できていないのか分からなくなる。高校時代は英語の授業が、週に3時間、単なる「英語」と言う科目で、試験前には本文の和訳を丸暗記して何とか切り抜けてきた。父親から英語は大事だと口癖のように言われて多読や英会話等に取り組むがうまくいかない。

(2) 基礎教育センターを訪れた時の理解度は以下の通り。

- ①三単現のSが分からない。
- ②中学1・2年レベルの単語が書けない。
- ③英語は丸暗記だと思っている。
- ④英検4級レベル（中学2年レベル）の並べかえ問題さえ解けない。

(3) 45分の個別指導での具体的な例

- 0:00 - 5:00 その日読む英文レシピの料理についての話をする。（導入・興味付け）
- 5:00 - 10:00 音読の手本を示し、スラッシュを入れる所を指示する。
- 10:00 - 30:00 最初は、教員の後について音読、その後一人で音読させる。
- 30:00 - 40:00 英文レシピを日本語で説明させる。知らない単語は流れて予測させる。
- 40:00 - 45:00 解説や補足をしていく。

(4) 学習期間

4月から7月（3か月間）週2回

(5) 省察 [学生の変化：態度面]

- ①授業中、当ててほしいと思うようになった。
 - ②自宅で自ら音読をするようになった。
 - ③駅や街中で英語での表示が何と書いてあるのか、と興味を持つようになった。
 - ④授業の予習・復習以外のページも読むようになった。
- [学生の変化：スキル面]

- ①一人で英文レシピが読めるようになった。
- ②家庭や学校で読み方を褒められるようになった。
- ③英語を、暗記科目ではなく言葉としてとらえるようになった。

事例②学生B（短期大学1年生）の場合

(1) バックグラウンド

中学・高校と英語が嫌いであまりなま社会人となり、英語からは縁のないまま過ごしてきたが、短大入学後に本校の大学編入には受験科目に英語があることを知る。中学時代は、英語の歌が好きであったが、高校時代いわゆる進学校に入学し、授業で「ここは難しいところですが…」という先生の言葉だけが耳に残り、それ以降授業の内容・英単語・文法が全く頭に入らず赤点をとってしまう。英語の時間が苦痛でたまらない。短期大学部食物栄養科学科から大学栄養科学部の大学編入のためには英語を避けては通れないということを知り、基礎教育センターのドアをたたく。個別指導があるということから一縷の望みを託していたという。

(2) 基礎教育センターを訪れた時の理解度

Vとは何か、be動詞とは何か。sがつくのは複数形だけではないのかというレベル。

(3) 指導例

中学1年レベルの英文法を教えつつ、英語の拒絶意識を減らしていくために、音読指導を並行して実施。

(4) 学習期間

1年生4月から2年生夏休みまで。

(5) 省察 [学習の変化：スキル面]

- ①4月、今まで聞けなかったbe動詞と一般動詞の違いを理解できるようになる。
- ②6月、音読の途中で、英文レシピの意味がイメージできるようになる。
- ③10月、食物栄養学科1年生全員対象の英語基礎力テストで163人中31番
- ④3月、編入試験の過去問題長文読解が辞書無しで解答でき、感動を越えて自分自身の成長に驚く。

2.4 音読指導を終えて

学生Aは、中学初歩レベルの語彙力であったが、英文レシピの音読により、辞書も引かず一人でレシピが読

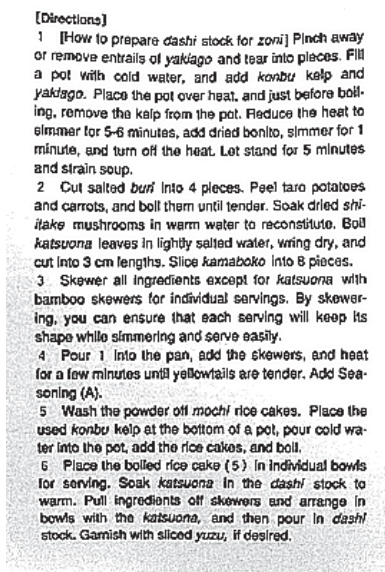


図1 「博多雑煮」『英語で楽しむ福岡の郷土料理』（海鳥社）

めるようになった。レシピの音読学習を続けることで、3か月後には、未知の単語が出てきた場合でも前後の流れで意味を推測する力を習得していた。参考までに一人ですらすら解ける様になっていたページを表記する。

学生Bの変化については、平成25年3月、春休みの学習時に過去の入試問題を解かせた時の解答の一部を記載する。

If you rely heavily on konbini bento or other processed foods, this should raise some health concerns.

学生Bの解答：もしあなたがコンビニ弁当や他の加工食品を頻回利用したら、それは何らかの健康障害を引き起こす。

この英文が長文の一部ではなく、短文和訳として辞書を引きながら和訳しなさいと指示していたならば、おそらくこの学生は、rely, heavily, processed, raise, health, concern, と前から順に英和辞書を引いているだろうと推測できる。そして、raiseという単語の意味がいろいろあってどれを使って和訳すべきか悩み、concerns（複数形なのでSが付いている）という単語が辞書では見つからないところから投げ出したくなる思いで和訳に苦戦する姿が想像できる。この英文を読むにあたって英単語の暗記などは一切やっていないものの、完全な解答ではないが、語彙を予測し大意はとれていた。

この学生たちは概ね目標を達成することができた。具体的には、学生Aの場合は、英語が理解できるという実感と自分に合った学習方法を見つけることが出来た。学生Bの場合は、編入試験に向けての英語の基礎を作ることが出来た。到達目標は異なっている2人だったが、「料理が好き」という共通点を利用し、音読という

教授法で苦手意識を払拭できたといえる。

事例の2人共、こちらの予想を覆すほどの結果であった。これらの成果は、個別指導だからできる利点と音読指導に適したテキストの存在に起因するといえる。あらためて高等学校での教育法を大学で生かす新しい取り組みに参画出来たことを感謝している。

最後に、基礎教育センターでの指導は単位認定となる訳ではないが、現在、指導指標を残すためにルーブリックを作成中である。一般的なものとの違いは、4領域の他にレディネスの育成部分を追加しているところである。このレディネス育成部分こそが、大学・短大の学習導入、高大連携の核となるところであると考えている。今後は多様化する学生に応じていくためにリスニングや会話力向上を図るための実践指導を試みていきたい。

謝 辞

本調査研究は、平成23～25年度科学研究費補助金基盤研究C 課題番号23520736および平成25年度、26年度中村学園大学短期大学部プロジェクト研究の成果の一部である。

引用・参考文献

- Brown, H.D. (2001). *Teaching by principle*. 2nd edition, London: Longman.
- Richard, J.C. (2000). *Curriculum development in language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- TSUDA, Akiko. (2012). Developing an ESP course and materials for dieticians, *IATEFL Journal of the English for Specific Purposes Special Interest Group*, Winter 2011-Spring2012 Issue.
- 井上奈良彦、津田晶子. (2007). 「卒業生による全学教育英語プログラムの週及評価－「仕事で英語を使う」九州大学卒業生対象の個人面接の分析から－」. 『大学教育』九州大学高等教育開発センター.
- 白畑知彦、他.(2009). 『改訂版英語教育用語辞典』.. 大修館書店.
- 津田晶子、松隈紀生、トーマス・ケイトン.(2009). 『英語で楽しむ福岡の郷土料理』海鳥社.
- 津田晶子.(2013). 「第4章日本におけるESP教育の実践例」. pp.186-189. 『21世紀のESP』. 大修館書店.
- 津田晶子.(2013). 『国際化拠点大学における英語教育のニーズ分析とカリキュラム開発』.. 海鳥社.
- 津田晶子.(2013). 『日本の栄養士・管理栄養士養成校における英語教育調査』報告書. 平成23～25年度科学研究費補助金基盤研究C 課題番号23520736 <http://www.akikotsuda.com/>

uploads/3/8/3/3/3833685/23521736.pdf.(2014年9月29日参照)

中村学園大学・短期大学部公式ホームページ.(2014). <http://www.nakamura-u.ac.jp/>.(2014年9月29日参照).

松本茂.(2013).『学生と楽しむ大学教育—大学の学びを本物にするFDを求めて』.ナカニシヤ出版.